

## 丸山眞男先生とアメリカ

入江 昭

私が丸山先生と最後にお会いしたのは、一九九五年一月十七日、関西大震災の日だった。たまたま私はその前日から、御殿場の経団連ゲストハウスで開かれたセミナーに出かけていたので、そのことを知った先生は、自分は熱海にいるから、帰りに寄っていきなさい、といわれた。そのつもりでいたのだが、その日の朝の大地震で、交通手段は麻痺状態。幸い御殿場から熱海の駅まで送ってくれる方があったので、約束の時間よりも早く到着した。さっそく先生にお電話したところ、

今すぐタクシーで来るようにといわれ、海辺の美しいところにある先生のお部屋で、ミカンを出していただいたのを覚えていた。そして、いいフランス料理の店を知っているから、夕食の予約をとっておいた。とのことで、先生とまたタクシーに乗ってそこまで出かけた。

食事をしながら、一対一で先生と長時間お話ができたのは、ずいぶん贅沢なことだったと思う。お話の内容があまりにも面白かったので、私がたまたま持っていた一枚の紙切れをとり出して、小さな字でメモ

をとった。今でもその紙切れを大事にとつてある。それを見るたびに、先生との最後の出会いが思い出されるのである。その晩、名古屋から東京までの新幹線は運転していたので、それに乗って東京へ戻った。その後ふたたび先生とお会いすることはなかった。

\*

この小さな紙切れの中に一番大きな字で書いてあるのは、フォレットという人の名前と、その学者が書いた『新しい国家』(The New State)という本のタイトルである。おそらく食事をしながら、丸山先生が、一九三〇年代にいろいろ読まれた本のことを話してくださるのである。その本の中の出たので、私があわててメモをとったのである。というのも、この著者も著作も、私には初耳だったからである。私は大学院の学生時代からアメリカ史を専攻し、米国の思想史も一応は知っているつもりだったのであるが、私がまだ読んだことも聞いたこともなかった本を、丸山先生は戦前の日本で、すでに読まれ

ていた、ということには非常に感銘的だった。先生が当時から国家論に  
関心を寄せられ、英米をはじめ、フランス、ドイツなどの学者による  
研究書を片端から読んでおられたことは、よく知られている。

熱海での晩にも、フォレットのみならず、先生が一九三〇年代に読  
まれたケルゼンやイエルネック、あるいは日本の蠟山政道や大山郁夫、  
吉野作造などの学説について、いろいろと話してくださった。私は思  
想史の専門家ではないので、丸山先生の国家論について語る資格はな  
いが、ただ当時からフォレットの考えに関心を示されていたのは、興  
味深いことだと思う。というのも（これは先生とお会いしてすぐ米国  
に戻り、図書館で調べてわかったことだが）、フォレットという女性の  
政治学者は、すでに大戦中、従来の個人主義的あるいは自由主義的な  
国家論とは違う解釈を堂々と発表していたからである。彼女の考えで  
は、個人や階級よりは、市民の形成する各種のグループこそ、これか  
らの国家の基盤となるはずであり、「グループ・ライフ」の強化なしに、  
近代経済の直面する諸問題に対処する方法などはなかった。国際関係  
においても、国家が別々の行動をとるのではなく、国際機関を作り上  
げて、その中で協力していくことの必要性を指摘していた。したがっ  
て、フォレットは、伝統的な個人主義あるいは愛国主義に代わって、  
団体主義、国際主義の時代が到来するであろう、と予言した。

丸山先生がこの本を読まれた一九三〇年代には、ある意味ではフォ  
レットの予言が的中したが、ドイツやソ連におけるように、団体主義  
とはいっても一党独裁主義への傾斜が見られ、一方国際社会において

は、フォレットの支持した国際連盟が、日本の単独行動主義などのた  
めに、機能力を著しく低下させていた。そのようなときに、丸山先生  
はどんな気持ちで彼女の本を読まれたのであろうか。憶測することし  
かできないが、それから六十年たったあとでも、鮮明に記憶されてい  
たのをみれば、一九三〇年代のアメリカの政治学界を高く評価されて  
いたのは確かであろう。

\*

その後三十年近くたって、一九六一年、先生は奥様同伴で、ハー  
ヴァード大学に一年間滞在された。お二人にとって、はじめてのアメ  
リカ生活だった。中国史研究のフェアバンク教授が、先生の招聘につ  
いて尽力したことはよく知られている。私はたまたまその年、ハー  
ヴァードの歴史学部から博士号を受け取った、駆け出しの学者だった  
が、その前に一、二度東京でお目にかかっていた関係で、一年間、ご  
夫妻と親しく接する機会を得た。当時ハーヴァード大学には、丸山先  
生のほか、日本の官庁や大学から多くの優秀な方たちが滞在していた。  
おそらく平均年齢が三十歳にも至らなかつたわれわれは、毎週のように  
丸山先生を囲んで、わいわい議論したものである。

\*

余談になるが、先生ご夫妻がハーヴァード大学を去り、オクスフォー  
ド大学のセント・アントニー・カレッジで次の一年間を過ごすために、  
ボストンの飛行場を発たれたのは、一九六二年の六月のことだった。  
その時私たちのボロ車で、ご夫妻を空港までお送りした。その年の四

月末に生まれた長女も一緒だったが、その子は出生時の事故で、脳障害を負っていた。丸山先生ご夫妻から、このことにかんじて、心のこもったお手紙を受け取り、それが私たちにとって非常な励みとなった。もう四十年以上も前のことである。

私たちにはその後もう一人の女の子が生まれた。彼女は一九七六年に先生ご夫妻が米国を再訪されたときに、大変親しくしていただいたのを、今でもよく記憶している。たまたま一九七六年の三月から六月にかけて、私はカリフォルニア大学のパークレー・キャンパスで、一学期間教える機会があった。そして偶然にも、まったく同じ時に、丸山先生も、それまでいらっしやったプリンストンを離れて、パークレーに移られた。奥様も最初の二週間ほどは一緒だった。私たちとしては、ほとんど毎日のご夫妻と接する機会があったわけで、お二人とモンテレーなどヘドドライブしたのを、懐かしく思い出す。奥様が東京にお帰りになった後は、先生には「夕食のときにはいつでもおいでください」と、スタンディング・インヴィテーションをさしあげておいたので、先生が泊まっておられたウイメンズ・ファカルティー・クラブから歩いて十分ほどで、かなり急な坂を上って、よく我が家まで（時には迷子になられた挙句に）ひんばんにやってこられた。今にして思うともったいないほど多くの時間、丸山先生を独占できたことになる。とくに先生が日本に帰られる直前、ゼビヨセミテを見ておきたい、とおっしゃったので、レンタ・カーで四人で出かけ、数日のあいだ、実に楽しいときを過ごすことができた。その時往復数時間の車

の中で、先生がいろいろなオペラの Aria を歌いだしたり、ヨセミテの壮大な滝や連山の写真をとるために、カメラを持った先生が地面に仰向けになって、写真をとっておられた光景を昨日のことのように思い出す。

\*

丸山教授とアメリカ、というテーマでありながら、私や私の家族と先生ご夫妻との話を中心になってしまったが、最後に、もっと一般的に、丸山教授が米国をどうみておられたのかについて、私なりの感想を述べてみたい。最初に触れたように、先生の政治思想史研究の中で、米国思想史の占める度合いはかなり大きかったのではなからうか。フォレットのほかにも、先生はレオ・シュトラウスやハロルド・ラズウェルのことをたびたび話しておられたし、ハーヴァードではタルコット・パーソンズやデイヴィッド・リースマンとも知り合って、かれらに代表される社会学にも触発されたようである。アメリカに來られる直前、一九六〇年に箱根で開かれた、いわゆる「日本近代化セミナー」にも出席されて、米国における日本研究の実情にも触れられていた。アメリカでは、ハーヴァード、プリンストン、コロンビア、パークレー、あるいはシアトルのワシントン大学などで、講演をなさったり、セミナーに顔を出されたりしていた。そのような接触をおして、米国の学界や学風について、かなり良い印象を受けられたようである。アメリカの学者に対して、とくに批判的なことはおっしゃっていません。思ふ。もっとも、日本研究とはいいながら、日本文

も満足に読めない学者に対しては、手厳しかった。日本語を知らないで理論をふりまわすだけ、という態度に批判的であられたのみならず、学問の根本には言語があるのだから、一言一句の厳密な分析なしに、歴史を語ることはできない、という歴史観をもっておられたように思われる。

米国の学界を高く評価されていたのと同時に、丸山先生は当時のアメリカの社会や文化に対しても親近感を抱かれていたように見受けられた。先生の近代化論が、どこまで米国に適用されるのか、私は直接うかがったことはない。しかしアメリカ人一般の開放性や友好性には、印象づけられておられたと思う。もともと学者以外に接触なされた人の数は限られていたが、音楽会、とくにオペラには奥様ともどもひんばんに行っておられた。プリンス頓時代にはメトロポリタン・オペラによく出かけられたとのことだし、バークレーに滞在されていた一九七六年には、シアトル・オペラがワグナーの『指輪』を、一日おきにドイツ語と英語で歌う、というので、都合八回のすべてを聴きにいかれた。〔『指輪』といえは、それから七年後、一九八三年にバイロイトで先生と偶然お会いしたことを思い出す。その時私たちはアメリカの音楽家の友人と出かけていていたのだが、先生も嬉しそうに英語でワグナーを論じられた。〕

\*

そのようにお気に入ったアメリカではあったが、米国の政府や外交政策などにかんしては、かなり批判的でおられた。とくに広島への原



在学生をはじめとする若者の聴講も多く、大盛況であった

爆投下については、最後まで非難されており、どうして米国政府が非を認めないのか、不可解だとされてきた。冷戦外交とか、核武装とかについても、批判的でおられたのは当然である。ただ一九六〇年代や一九七〇年代の米国は、修正主義的、反体制的な風潮も強く、学者や学生のあいだでもリベラルないしラディカルなものが多かったから、先生としても、生活なさりやすかったのではなからうか。今のように、政府のみならず、一般市民も保守化している状態を、先生はどう思われるか、直接うかがえないのが残念である。

● 講師プロフィール ●

いりえ・あきら。一九三四年、東京生まれ。一九六一年米国ハーヴァード大学歴史学部博士課程修了。米国の諸大学を経て、現在ハーヴァード大学歴史学部教授。一九八八年から米国歴史学会会長を務めた。専門は米国外交史、国際政治史。吉野作造賞、吉田茂賞を受賞。

〔『東京女子大学学報』五八四号、二〇〇三年九月号所収〕